

「架け橋になる共同体」

マタイによる福音書 9:1-8
コリントの信徒への手紙2 5:18-19

2026年1月11日
野村 友美 師

<成人祝福式によせて>

今日は礼拝の中で、成人祝福式を行いました。子どもたちが無事に成長して、成人を迎えたことをお祝いできるのは、ご家族にとっても教会にとっても本当に嬉しくて、この上なく幸せなことです。ここまで守り導いてくださった神様に感謝するとともに、これからの大人としての歩みもまた祝福のうちに守られますよう、一緒に祈ってまいりましょう。

さて今日の聖書の物語は、イエス様が起こされた癒やしの奇跡のうちの一つです。

ただ、この癒やしのエピソードには、少し風変わりなところがあります。イエス様が目を留めたのは、癒やされる本人じゃなくて、彼を連れてきた人たちの「信仰」でした。

そしてイエス様は病人に向かって、「あなたの病気は癒やされる」じゃなくて、「あなたの罪は赦される」と宣言なさいます。しかも、「あなたの罪は赦される」と言うのと「起きて歩け」と言うのと、どちらが簡単だと思うか、と質問するんです。このイエス様の質問、皆さんはどちらだと思いますか？

すぐに目に見えて結果がわかるのは「起きて歩け」の方ですから、これはやっぱり「あなたの罪は赦される」の方が簡単なんではないでしょうか。

でも、まさにそう言ったために、イエス様はその場にいた律法学者たちから、こう判断されまし

た。この男は神様を冒涇している！と。

イスラエルの律法では、神様を冒涇する人は石をぶつけて死刑にするように、と定められていました。そう、「あなたの罪は赦される」とイエス様が言われたことによって、律法の専門家たちはイエス様を、死刑に値する罪人だと判断したんです。

神様について人々に教えたり、病気を癒したりしているというイエス様の噂を聞いて、律法学者たちはイエス様のことを確かめるために来ていたんでしょう。イエスのやり方は、律法に違反していないか？

不思議なことをしてたくさんの人を集めているけれど、言っていることや、やっていることは、ちゃんと律法に沿った正しいことか？自分たちの目で確かめて、イエス様への判断を下すために、律法学者たちは群衆に混じってやって来ていたんです。

まるでイエス様をテストする試験官のような気持ちで、彼らはイエス様の言葉をじっと聞いていたんでしょうね。

そして、イエス様が言われた「あなたの罪は赦される」という言葉に飛びつきました。

罪を赦すことができるのは神様だけなのに、このイエスという人は神様の権威を勝手に自分のものにしている。律法学者たちはそう考えて、心のなかでイエス様に判決を下したんです。

「お前は律法違反の罪人だ」と。

<「あなたの罪は赦される」>

群衆に混じって、律法学者たちがじっと様子を伺っていたことに、イエス様も気がついておられたんでしょう。だからこそ、彼らが心のなかでイエス様に有罪判決を下したことも、すぐに見抜かれました。

だったらなぜイエス様はこの時、わざわざ罪の赦しを宣言なさったのでしょうか。「あなたの罪は赦された」と言うほうが、「起きて歩け」と言うよりもイエス様にとっては簡単だったから、ではありません。

罪を赦すことも、人を癒すことも、どちらも神様の領域です。神様と人間の間隔を回復させて、天の国の喜びを知らせるために。赦すことも癒やすことも、どちらの権威も神様からイエス様に与えられていました。

だからイエス様にとっては、むしろ先に目の前の病人を癒してしまった方が話が早くて楽だったでしょう。神様がイエス様を通して働いておられるという、目に見える証拠が先にあれば、律法学者たちだって文句の言いようがありませんでしたから。

なのにどうしてイエス様は、まず先に「あなたの罪は赦される」なんてことを、連れてこられた病人に向かっておっしゃったのでしょうか。

それは、目の前のその人には癒しよりも何よりもまず、「あなたの罪は赦される」というイエス様の宣言が必要だったからです。

当時の人々は、病気の原因は「罪」だと考えていました。病気になった本人か、その親や先祖の誰かが罪を犯したから、その罰として病気になる。そう信じられていたんです。

だから周りの人たちだけじゃなくて、病人自身も「これは神様からの罰だ」と受け止めていました。神様は、私のことを怒っておられる。私は神様から愛されない、見捨てられた罪人なんだ。そんな罪悪感や悲しさを、病人たちは病気の辛さに加えて味わっていたんです。

「自分たちは神の民だ」という誇りを持っていたイスラエルの人にとって、それはどんなに心細いことだったのでしょうか。

苦しい時にいちばん頼りたい、いちばん愛して

ほしいと思っている存在から見捨てられた、と感じるんですから。

ここに登場する病人は、中風を患っていたと紹介されています。現在の私たちが知っている「中風」は、脳卒中なんかの後遺症で手や足が麻痺したり、体のどこかしらがうまく動かなくなったりする症状のことです。イエス様の時代の「中風」が具体的にどういう病気だったのかはわかりませんが、やはり体が不自由になったり痛んだりする病気だったようです。

寝床ごとイエス様の前に運ばれてきたということは、この人はもう自分の力で動くこともできないほど重症の患者でした。

病気が重いということは、この人が抱えている罪悪感も、味わっている心細さも、それだけ大きかったでしょう。

動けない苦しさや体の痛みと同じぐらい、いや、もしかするともっと強く、この中風の人は、神様からの愛と赦しが欲しくて苦しんでいたんです。

だからイエス様はどんな言葉よりも先に、「子よ」と呼びかけました。あなたは神様から見捨てられてなんかいない、今も神様の大事な子どもの一人だ。そういう励ましと愛情を込めて、イエス様は「子よ」と動けない病人に向けて呼びかけます。

そして「元気を出しなさい、あなたの罪は赦される」と宣言なさったんです。目の前のこの人がいちばん必要としているもの。神様からの愛と赦しを、真っ先に手渡すために。

<架け橋になる共同体>

この時イエス様が目に留めていたのは、自分では動けないこの病人を寝床ごと運ん

で、イエス様の前まで連れて来た人たちの「信仰」だった。そう福音書は伝えています。

この人たちが病人の家族だったのか、親しい友達だったのか、どういう関係の人たちだったのかはわかりません。何にしても、この病人が抱えていた体と心の苦しみを、間近で見てきた人たちだったんだろうと思います。

そして「どうにかしてこの人を助けたい」と、日頃から願っていたのでしょう。彼らはイエス様の噂を聞いて、「イエス様ならきっとこの人を助けてくれる！」と期待して、力を合わせて病人を運んできたようです。

他の福音書は、彼らが屋根に穴を開けて、そこから病人をイエス様の前に吊り降ろしたという大胆なエピソードを伝えています。

イエス様は誰かの家の中で、大勢の人に囲まれながら話をしていたので、近づくことができなかったからです。

普通なら「仕方ないな」と諦めてしまうところでしょうが、彼らは諦めませんでした。

とは言え、まったく躊躇しなかったわけではなかったと思います。大勢の人たちが集まっている目の前で、そんな常識外れのことをやってのけるのは、かなり勇気が要ったでしょう。屋根に穴を開けられた家の持ち主からは、確実に怒られます。それでも、とにかくイエス様の前まで連れて行けば、この病人のことはきっと助けてくれるはずだ。何とかこの人を助けてほしい！

そんな思いで、この人たちはイエス様の力に信頼して、イエス様の憐れみに期待してすがりついたんです。「あなたは必ずこの病人を助けてくださる」と信じて頼ってきた彼らを見て、イエス様はこの人たちのまっすぐな信頼にお応えになりました。

そして「助けてほしい！」と彼らが願っているこの病人に、いちばん必要だった罪の赦しの宣言

を差し出したんです。

イエス様を通して宣言された、神様からの愛と赦し。そこにあったのはまさに、天の国の喜びそのものだと言っていいでしょう。

ですが、それを見ていた律法学者たちは、目の前のその光景から救いや喜びを受け取ることができませんでした。

イエス様の言うことや、やることが、自分たちの思う正しさに合っているかどうか。

そのことだけに心を奪われていたんです。自分たちの基準や思いばかりが気になって、目の前で何が起きているのか気づけないでいる。そんな人たちに、神様が今まさにここで働いておられることを知らせるために、イエス様は改めてこの病人に呼びかけました。さあ、起き上がって寝床を担いで、家に帰りなさい。そうイエス様から言われた途端、それまで自分で動くこともできなかったはずの人が、みんなの目の前でしっかりと立ち上がりました。そして言われたとおりに、自分の家へと帰っていきました。誰も疑いようがない形で、イエス様を通して、神様の赦しと癒やしが誰の目にもはっきりと現されたんです。

群衆はみんな恐ろしくなって、人間にこれほどの権威をゆだねられた神様を賛美した。そうマタイの福音書は、人々の様子を描いています。群衆の中には、あの律法学者たちもいました。イエス様がどういう御方なのか、イエス様の言葉が何を意味しているのかも、わからなかったし受け取ろうともしなかった律法学者たち。

彼らも、イエス様が引き起こされた出来事を目撃しました。この赦しと癒やしの出来事を起こす権威を、神様がイエス様に委ねておられる。

その事実を目の当たりにして、律法学者たちもきっと群衆と一緒に神様を賛美したろうと思います。これも、小さな奇跡と呼べる出来事だったんじゃないでしょうか。

神様から引き離されて苦しんでいた病人を、そして気が付かないうちに神様を見失っていた律法学者たちを、神様の愛と救いに引き戻したものの。それは直接的にはイエス様の言葉と、イエス様が引き起こされた出来事でした。

ですがその始まりにあったのは、病人をイエス様のところへ連れてきた「その人たちの信仰」だったことを、私たちは覚えていたいと思います。苦しみ悲しんでいる人に寄り添って、何とかして助けたいと願って、知恵と力を尽くして行動した人たち。イエス様の力に信頼して、イエス様の憐れみに期待して、「助けてください！」とまっすぐにすがりついた人たち。「その人たちの信仰」を見てイエス様はお応えになったと、今日の物語は最初に伝えています。

愛と信頼に突き動かされた「その人たちの信仰」が、イエス様と人々をつなぐ架け橋になったんです。この架け橋になるという役目を、私たち教会もまた委ねられています。使徒パウロはコリントの教会にあてて書いた手紙の中で、こう宣言しました。

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世をご自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」
(コリント2 5:18-19)

一人ひとりに命を与えて、守り導いてくださっている神様を、私たち人間は時に無視したり、自分勝手に利用しようとしたり、反抗して離れようとしてしまいます。

目の前にあるはずの神様の愛を、与えられている恵みや喜びを受け取れなくて、寂しくて悲しくてもがき苦しみます。

そんな私たちすべての人に、神様はイエス・キリストを通して、和解の手を差し伸べておられるんです。

神様から差し出してくださった和解の手。イエス・キリストに出会って、その愛の果てしなさと力強さと温かさを知った一人ひとりが、他の誰かの架け橋になるようにと招かれています。

差し伸べられた神様の手の中へ、誰かがまっすぐに飛び込んでいけるように。嘆き苦しむ誰かが、イエス様に「助けてください！」とすがりつけるように。

目の前の誰かをイエス様のところへ連れて行けるように、私たちはそれぞれの言葉で、行動で、生き方で、祈りで、架け橋になる務めを委ねられた共同体です。

だからどんな時でも、イエス様に信頼して、期待して、愛に突き動かされる教会であることができますように。

イエス様にしっかりとつながる架け橋になれますように、今日も私たちはご一緒に聖霊の助けを祈り求めてまいりましょう。

お祈りいたします。